白山人類学　18 号　2015 年 3 月

研究ノート

タイにおける有機農産物のフェア・トレードと仏教思想

鶴　田　　格*

Fair Trade of Organic Farm Products and Buddhism in Thailand

TSURUTA Tadasu

Abstract

In Thailand, Buddhism has always had a close relation with alternative development practices including fair trade, that is called in Thai “a trade based on *dhamma* (Buddhist truth or law).” The 1970s and 1980s saw an intertwined development of thought and practice in line with “socially engaged Buddhism,” as an alternative to fading Marxist movement. Some Buddhist monks and lay intellectuals formulated new Buddhist ideas which tried to address various social problems caused and aggravated by a rapid modernization of the society. In poor villages, “development monks” devised and practiced a variety of innovative ideas for rural development, in order to narrow a widening gap between urban and rural economy. Sharing wealth among community members on a basis of Buddhist virtues (asceticism and compassion) was among key features in both practices on the village level and abstract theories. Existing theories and practical experiences on alternative rural development provided an intellectual and practical basis for the following development of organic agriculture and fair trade movement, which expanded in Northeast Thailand from the 1990s. Today, after more than 20 years since the first fair trade rice was exported from the region, there are a number of organic rice producer groups, which mainly regard fair trade certification as a mere convenient measure to have an access to the niche market in Europe and USA. While most business-oriented organic farmers seems to have forgotten the original vision of fair trade and organic farming, some farmers launched “moral rice project,” which aims at returning to Buddhist origin of organic agriculture, at the same time creating an alternative market channel to domestic urban consumers.

キーワード：フェア・トレード，有機農業，タイ，仏教，開発僧

* 近畿大学農学部；Faculty of Agriculture, Kinki University, 3327-204, Naka-machi, Nara, 631-8505/ tadasutsuruta@hotmail.com

Keywords: fair trade, organic movement, Thailand, Buddhism, development monks

I　はじめに

フェア・トレード（FT）はタイ語やラーオ語でカーンカー・ティー・ペンタム（*kaan khaa thii pen tham*）と表現される[1)]。直訳すれば「タム（*tham*）の状態にある商売（交易）」という意味になる。タムもしくはタンマ（*thamma*）とは公正や正義などの世俗的な意味もあるが，同時にとても仏教色の濃い概念である。これはもともと（上座部仏教の聖典にもちいられる）パーリ語由来のことばで「仏法」つまり仏の説いた道（真理，正しい道）やそれに基づく個人の徳のことをあらわす。FT と一見ほど遠い宗教的な概念であるタンマが FT を表現するのに使われるようになったのは，1970 年代以降の反体制的政治運動のなかで社会的正義をあらわす言葉としてクワーム・ペンタム（*khwaam pen tham*）（「タムであること」）という表現が頻繁に使われるようになったことと関連しているのではないかと考えられる［Ito 2012: 188］。クワーム・ペンタム（*khwaam pen tham*）は現在では宗教とは関係なく単に「正義」「公正」などを意味することもあるが，同時にある種の仏教的社会思想との連想を余儀なくされる，ともイトウ（Ito）は述べている。

仏教をふくむインド文明の深い影響下に成立し，現在でも仏教徒が人口の約 95％をしめるタイ社会において，社会倫理に関わる事柄を考察する際に仏教由来の概念が使われるのは当然のことである。近代化のゆがみがもたらすさまざまな社会問題（貧困問題や環境問題）に対処するにあたってタイの多くの知識人がよりどころとしたのも仏教的アプローチであった。しかし，そこで表現される思想は決して特定宗教の教えといったような静的なものではなく，それぞれの時代のなかで僧侶や知識人が状況と対峙しながら実践のなかで生みだしてきた動的なものであり，また論者によってその内容が微妙に異なる個性的なものである。とりわけ共産主義運動の挫折後の 1980 年代には，オルタナティブな発展を求めるさまざまな動き（有機農業運動をふくむ）が仏教思想と関連づけて論じられた。また本稿で考察の対象とする東北タイで 1980 年代にはじまった有機農業運動（のちにそれが FT へと展開）の特徴は，それが当初は「開発僧」とよばれる仏僧たちによって主導された点にある。このように FT の実践と有機農業運動（両者はわかちがたく絡みあって発展してきた）はタイにおいては仏教の思想と実践とに，深い関連をもっているものと考えられる。

しかし筆者が 2010 年代に入ってタイ東北部における有機ジャスミン米[2)] の FT の調査を行

1)　ラーオ語については箕曲在弘氏（東洋大学）のご教示による。ただしラーオ語ではティー（*thii*）がぬけおちてカーンカー・ペンタム（*kaan khaa pen tham*）と表現されることが多いという。

2)　ジャスミン米とは，タイ産の高級香り米の総称である。国際市場で高値で取引されるようになったため，1980 年代から東北部での生産が急拡大した。

った段階では，そうした仏教的価値観はむしろ後景に退き，かわって有機米生産のビジネスとしての側面が前面に出るようになっていた。ほかの地域の FT 運動と同様に，タイの FT も当初は 1990 年代に社会的弱者（北部の山岳民族や東北部の貧しい農民）の生活支援のための一種の社会運動として始まったのだが，それがビジネスとして拡大するにつれて初期の倫理的な色彩が薄れて経済的な行為としての側面が強まる傾向にある。他方で，タイ東北部の事例がユニークなのは，有機米生産を単なる収入増のための手段と捉える生産者が多いなかで，オルタナティブな農村開発を目指していたころの初期の理念にこだわる人々がいまだに少なからず存在しており，なかには仏教的な原理への回帰を訴える生産者グループまで出てきたことである。こうした価値観の分裂とせめぎあいを農民レベルで正確にとらえるには，長期にわたる社会の内部からの観察，すなわち人類学的・民族誌的な手法が不可欠である。しかし筆者の知る限りタイ東北部の FT もしくは有機米生産に関する先行研究のほとんどは経済的な側面のみに焦点をあてたものである［Bechetti et al. 2009; Nitiphong and Charuk 2007; Manas and Prasit 2007 など］。しかし FT 運動は，共通の文化的・宗教的背景を持ちながらも違った考えを持つ諸個人がともに創造しまた絶えず変革していくところの複雑な社会的事象であり，個々の農家の収入の増減だけを論じるような経済学的な視点だけではその多面的な現実を理解することはできない。そこで筆者らは有機米の FT を単に経済の問題として捉えるのではなく，社会学・社会史的アプローチによってその社会運動としての総体を明らかにしようと試みた［Tsuruta and Suriya 2014a; 2014b］。しかし筆者らの研究はまだ運動のアウトラインを描いたに過ぎず，FT（あるいは有機農業）と既存の価値体系とりわけ仏教思想・仏教実践との関係の詳細，さらには有機米生産農家の FT への認識のあり方にまで踏み込んだものではなかった。またタイのオルタナティブな開発と仏教の関わりについては，タイ人自身や日本人研究者による先駆的な研究がいくつもあるが［Seri 1988; 西川・野田編 2001; 櫻井 2008; Ito 2012; Pinit 2012; 岡部 2014 など］，それらは FT や有機農業運動に直接焦点をあてたものではない。

そこで本稿では，タイの FT や有機農業をめぐる生産者の価値の相克に関する将来の民族誌的研究のための基礎的作業のひとつとして，まず FT 運動・有機農業運動と仏教思想・仏教実践とのかかわりについて検討してみたい。本稿ではまず，現代タイにおいて新展開をみせた仏教的経済思想のなかで有機農業や FT の実践がどう位置づけられうるのかを考察する。次に，具体的な事例としてタイ東北部において展開してきた有機ジャスミン米の FT をとりあげ，それが村レベルでの仏教の実践や思想とどのように関わってきたのかを，主として先行研究に基づき，部分的に筆者がフィールド調査[3)] からえた知見を加えながら検討したい。

3)　本稿のもととなったフィールド調査は，2012 年 3 月，11 月，2013 年 9 月，10-11 月，2014 年 10 月の 5 回にわけて，タイ東北部スリン県とヤソトン県（図 1）を中心に合計 7 週間程度実施された。調査内容は，有機ジャスミン米の FT に従事する複数の生産者組合のメンバー（および元メンバー）に対するインタビューならびに，生産・流通の現場における参与観察から成っている。

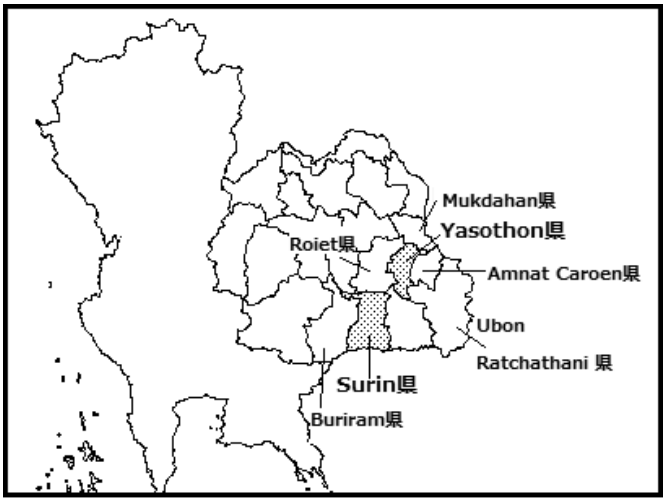


図 1　タイ東北部と調査地

出典：筆者作成

II　タイにおけるオルタナティブな開発の思想と仏教思想

1　仏教的な社会思想の展開

経済成長至上主義的な開発とは異なるオルタナティブな発展をもとめるタイの社会運動の言説や実践は，仏教思想とポピュリズム，共同体主義，農本主義，民主主義，ナショナリズム，環境主義（有機農業の推進など）などの多様な価値観が混然一体となった独特なものである［北原 1996］。なかでもそれらが仏教的な伝統と関連しているところにその最もユニークな特色があらわれている。タイでは 1970 年代からいわゆる社会行動仏教（socially engaged Buddhism）と一括されるような思想や実践が，僧侶や在家の仏教徒のあいだで広範にみられるようになった。1976 年の民主化運動の弾圧後，仏教的価値観と非暴力を標榜する「社会に関わる宗教者のための連絡委員会」を設立したスラック・シワラックは，近代的な開発のもたらす社会矛盾を批判的に考察するために仏教的な考え方に依拠する知識人の代表格である。1970 年代からはじまったスラックたちのオルタナティブな発展を模索する運動は，反体制運動挫折後の社会改革派の知識人たちを思想的に支えるものとなり，またさまざまな NGO の設立など実践的な活動につながっていった［西川・野田編 2001: 66-82, 242-243; Ito 2012: 197-210］。

スラックたち知識人の運動は，たとえば主流派仏教組織から距離をおいて独自の思想と実践を展開してきた僧プッタタートのような思想家に注目した。戒律を守らず呪術的な儀礼を重視する一般の僧侶や，形骸化した国家的な仏教教団サンガに失望していたプッタタートは，正統

派の教理に厳しい批判をくわえるとともに，資本主義に依拠した現代文明をもまた批判しタンマ（仏法）に基づく理想社会を構想した。またサンガの内部からもパユット師のように仏教の社会的経済的意義を平易に説く高僧があらわれた。また旺盛な研究・出版活動を通して農村の現場で奮闘する「開発僧」らの試みを支援してきたセーリー・ポンピットのような実践的知識人もいる。1980 年にはスラックら知識人を中心に開発僧をも巻き込んだ「開発のための宗教委員会（TICD）」というネットワーク組織ができ，開発僧のための研修や情報交換を精力的に行ってきた。こうした流れとは別に，近代的物質文明に反対して厳格な戒律に基づく質素な生活をラディカルに追求するサンティ・アソーク[4)] のような仏教の異端セクトが影響力を強めている［西川・野田編: 38-107, 179-183, 244-245］。

上座部仏教は，一般的には個人の煩悩からの解脱をその本分とする。悟りを得るためには個々人が（1）戒律を守り，（2）瞑想をし，（3）正しい智慧を得るという諸実践を経なければならない（「三学」）。しかし，上述の改革派知識人の思想に共通しているのは，仏教を個人の内面的な心の問題としてだけではなく，社会貢献など他者に対する働きかけの観点から検討し直した点である。仏教に基づくオルタナティブな発展理論に大きな影響を与えたプッタタートとパユットの両者について，西川［2001: 31］は，個人の悟りに関する仏教的議論を社会的な発展の領域にまで広げたところにその思想的貢献がある，としている。この二人の仏僧がユニークなのは，どちらも単なる仏教の哲学的思弁を超えて，政治経済の在り方に関してある種のビジョンを提示した点である。さらにこうした思想的基盤をふまえて，国王が主導する「足るを知る経済」の思想が 2000 年代になって国の経済政策や農村開発政策，さらには農民自身の実践に大きな影響力をもつようになり，それは FT や有機農業の実践とも無縁ではなかった。次に，こうした経緯を踏まえ，プッタタートならびにその影響を受けて展開した諸思想を中心に，FT および有機農業が現代タイの仏教的社会思想のなかでどのように位置づけられるのかを考察する。

2　タンマ（仏法）に基づく経済システム

FT の短期的な目的は，交易を通して途上国の生産者の経済的自立を支援することである。また長期的には途上国の生産者または貧者が搾取されるような現行の経済システムそのものを改革する，という理想がある。FT 実践の動機は多様だが，途上国の搾取への批判以外にも，利益至上主義的（欲望肯定的）な資本主義経済への批判，環境負荷の大きな大量生産大量消費型の経済システムへの批判などが動機となっている場合も多い。また富める者が貧しい者を救

4)　サンティ・アソークの共同体は有機農業を実践している点でも注目される。生産物の一部（ハーブ類など）は独自のルートを通して都市部などでも販売されている。なお仏教系ではないが，タイで有機農業・自然農法を推進する有力な宗教団体として日本の世界救世教がある。

う義務が暗黙に前提とされている場合もあるだろう。こうした価値観は，禁欲を旨とし（世俗的な価値を拒否し）平和で平等な社会を求める仏教的な価値観と相通じる点がたくさんある。たとえば前述の知識人スラックは，現代の消費社会に対するオルタナティブとしての仏教思想を論じるなかで，自由貿易に対立する概念として FT に言及している［Sulak 2003: 291］。しかしここではまず，FT が本格的に登場する以前にプッタタート，パユットによってそれぞれ著された，仏教と経済社会の関係を論じた二つの著作［Buddhadasa 1986; Payutto 1994］を中心に，こうした FT の理念につながるものを探ってみたい。

プッタタートとパユットの両者は，どちらもタンマ（仏法）をキー概念としてその思想を展開している。タンマは倫理的な正しい道を示すと同時に（善悪の問題），自然界の法則をも意味しており（真理の問題），つまり自然のあるがままの姿（*thammachaat*，法然）は倫理的にも正しい道と合致しているという考えが根本にある。両者の社会に対する基本的な考えは，だから，自然の摂理にそった社会経済を作らなければならないということになる。ここでいう自然の摂理とは，すべてのものがお互いに関連しており，それぞれが原因となり結果となるという，相互依存の関係にあるということである（「縁起思想」）［Buddhadasa 1986: 58-59; Payutto 1994: 19-20; 西川 2001］。

本来の自然に近い状態にあることが，なぜ正しい経済システムにつながるのだろうか。プッタタートによれば，自然界ではどんな生物であっても通常は自分が生きてくのに必要なだけの栄養をとるのであって，余分にとり蓄積する生物はない。（欲望とエゴイズムに目のくらんだ）人間だけが蓄積をし，社会的なバランスを壊してしまう。生物の本来のあり方からいえば，生存維持に必要なもの以外は他人と分かち合うべきである［Buddhadasa 1986: 59-60］。また縁起思想の観点からは，「自己」というものはいわば諸関係の結節点としてしかありえないので，実体がないものである。自己がないならば，自己が何かを（たとえば財産を）所有するということもない。だから生きていくために必要のない財産は共同体によって共有されなければならない。おなじ富者でも仏教的伝統における「富者（*seethii*）」の地位は貧民に食物などを布施する施設（*roongthaan*）をいくつ持っているかによって計られるのであり，自己利益のために物質的な富を必要以上に蓄積する「資本家（*naai thun*）」とは異なる。こうして自分の財産を分かち合う行動は，他者を思いやる慈悲の心（*meetaa karunaa*）から生まれる［Buddhadasa 1986: 50, 57, 61］。

プッタタートと同様にパユットも資本主義システムのもとでの過剰な利益追求を否定し，必要分以上の余剰は社会でシェアされなければならないと繰り返し述べている。資本主義あるいは近代文明の背後には個人の貪欲（*tanhaa*）があるが，人間には違う種類の欲望があり，それは正しい道を歩むことを欲する精進心（*chantha*）である。貪欲に振り回され後先を考えない過剰な生産消費につながるような経済は，他者や環境に害を及ぼさず，真の福利を実現するよ

うな中道をゆく協同的な経済によって取って代わられなければならない。そのためには個々人が精神的修養を通して貪欲を減らし，精進心を発展させる必要がある。その精進心が他者へ向けられる時に慈悲（*meetaa*）となる［Payutto 1994; 西川 2001］。

こうした高度に抽象的な哲学的思弁とは別に，実践現場にいる開発僧たちも独自の経済倫理思想をもち，また実行してきた。ここでとくに注目したいのはトゥン（*thun*：もとで，資金，資本）に関わる考えである。次章で詳しく論じるスリン県の開発僧ナーン和尚は，農村の貧困問題解決のため協同組合の設立などさまざまな村落開発プロジェクトを進める際に，その資本集めの方法として農民のタンブン（*tham bun*）の機会を利用した。タンブンというのは在家信者が功徳を積む行為で，善行を施すと来世にご利益があると考えられている。とりわけ僧侶や寺院に対する現金や物の布施・寄進が重要なタンブンの機会となる。後述するようにナーン和尚やほかの開発僧たちは，このタンブンという一種の経済的仕組みを農村開発の資本集めの手段として活用したのだが，その背景には資本（*thun*）を（寺や僧侶のためでなく）村人全体に役立つために使うことで，投資が利益ではなくタンマを生み出す，という考えがあった。ナーン和尚の言葉をそのまま借りると「利益をもとめない資本，それが仏法（タンマ）である」［ピッタヤー 1993: 61-62］。これは自分が必要とする以上の財産はコミュニティあるいは社会でシェアされるべきである，というプッタタートやパユットの思想と軌を一にしている。

以上のようにプッタタート，パユット，それから現場で活動する開発僧たちは，タンマに関する考察や実践のなかから，貧富の格差に典型的にみられる社会的な不公正を是正するための基本的な倫理や方向性を明示した。それは（余った）富または資本の共同体での共有ということであり，それを実現するのに上からの強制ではなく個々人の目覚め（意識変革）を強調しているところに仏教的な特色があらわれていると思われる［西川 2001］。またありのままの調和的な自然状態をよしとする考えは，必然的に環境保護の思想につながる。さらに，生きるのに必要な分だけを生産・消費する質素な生活をよしとする観点からは，地域コミュニティの経済的自立（自給的生産の重視）という論理が導かれるだろう。その方向性をより明確に示したのが，次にみる「足るを知る経済」の思想である。

プミポン国王が提唱したといわれる「足るを知る経済（*seethakit phoophiang,* sufficiency economy）」の理論は，1970～1980 年代にプッタタートやパユットによって提示された仏法に基づく経済システムに関する先駆的な議論を踏まえていると考えられる。このもととなる考えはすでに 1970 年代から国王が表明していたとみられるが，体系的な形で表立って論じられるようになったのは 1997 年のアジア通貨危機以後のことである。それ以降この思想は政府の公的な方針として採用されるまでになり，2002 年以降の国家経済社会開発計画や農村レベルでの開発プロジェクトに取り入れられるようになった［野田 2009］。それは（パユットの強調するような）「中道」や「小欲知足」といった仏教原理に基づく自立的な経済のあり方をめざすもの

で，（1）節度あるいは中庸（moderation, *phoopramaan*），（2）因果を理解すること（reasonableness, *mii heetphon*），（3）外部からの予測せざる経済的ショックへの抵抗力（免疫）をつけること（immunization/ self-immunity, *phuumikhumkan*），の三つを主要な要素とする。ここで「因果を理解する」というのは，自己の経済活動を経済的合理性の観点からだけ見るのではなく，他者や環境への短期的・長期的な帰結をも考慮にいれる，ということを意味する［UNDP 2007: 29-33］。「足るを知る経済」は必ずしも農業だけを念頭においたものではないが，もともとは「新理論（*thritsadii mai*, 1994～）」とよばれる自給経済に軸足をおいた農業の考え方が国王により最初に提唱され，そのあとで経済危機をきっかけに「足るを知る経済」というより一般的なアイデアに練り上げられたものとみられる［UNDP 2007: 28-9］[5)]。その新理論の基礎となったのは，次にみる複合農業の考え方である。

3　有機農業と仏教思想

タイで有機農業が注目を集めるようになったのは化学肥料や農薬の過剰な使用を前提とする輸出向け換金作物生産の問題点が明らかになってきた 1980 年代のことである。1980 年代半ばからバンコクの NGO 活動家が独自に研究をかさね，当初は「複合農業（integrated farming, *kaseet phosomphasaan*）」という概念が提唱された。これは商業的な単作農業ではなく，果樹をふくむ多種多様な作物を圃場や屋敷地に栽培し，池を掘って魚を飼い，家畜も飼う，という生態系保全と食料自給を重視した考え方である。しばらくすると日本の自然農法実践家の福岡正信の著作が翻訳され，「自然農業（*kaseet thammachaat*）」という概念が普及する。その後，有機農業（*kaseet insii*）という言葉が定着した。1991 年ころにはバンコクの NGO 活動家を中心にオルタナティブ・アグリカルチャー・ネットワーク（AAN，Alternative Agriculture Network，*khruea khaai kaseettrakam thaang lueak*）が設立され，持続可能な農業を求めて全国各地で有機農業運動を組織するようになる。こうした運動の農村部での拠点のひとつが，のちにとりあげる東北部のスリン県やヤソトン県であり，それがのちに有機米の FT へと発展していった［Withuun ed. 1996; Aarat 2013: 12-22］。

貧困にくるしむ東北部の農村での複合農業の可能性が盛んに論じられていた 1980 年代なかば，「仏教農業（*phuttakaseettrakam*）」という概念をうちだした思想家がいる。プッタートの深い影響を受けた著名な社会評論家プラウェート・ワシー医師である。プラウェートは，現代タイ農村の貧困や環境破壊の背景にはゆきすぎた近代化があり，とりわけ市場経済に巻き込まれたことに問題の根源があるので，それを脱して自立的な経済を創出しなければならない

5)　筆者が訪問したスリン県やその周辺部での有機農業実践グループや FT 生産者団体では，その拠点が「足るを知る経済」の学習センターとしても使われている事例がとても多かった。なかには名前に「新理論」という言葉を冠しているグループもあった。

と主張する［Prawase 1988: 26-32; 北原 1996: 85-87］。経済変動など外部からの予期せぬ影響に耐えられるだけの強い自立的経済の基盤となるのは，互いに深く関連する次の 5 つの要素である。すなわち（1）タンマ（仏法）に基づく個々人の精神（勤勉，小欲知足など），（2）複合農業のような自給的生産，（3）自然生態系のバランス，（4）前の三者に基づく経済的自立，（5）寺院を中心とし，互酬性に基づく共同体的生活，の 5 点である。

こうした要素をもつ農的生活は，また次のような仏教的原理に依存している。個々の事象を相互依存の観点から捉える縁起的なものの見方，自立的で簡素な生活，精神修養，協同などである。こうしてこの形態の農業は仏教原理と関連が深いので，仏教農業とよぶことができるという[6)]。ただ，これらは必ずしも仏教だけではなくどんな宗教にもみられる原理であるともつけ加えている［Prawase 1988: 20］。このように環境保護的農業の原理として（一切衆生が相互依存関係にあるという）縁起的な思想をもってくる考え方は，プッタタートの影響ではないかと考えられる。

こうした知識人の抽象的な議論は，しかし，一般の村人には理解しにくいものである。縁起などという高度に哲学的な思想よりも，一般の村人になじみぶかい仏教的倫理としては，たとえば在家の信者が守るべき戒律がある。具体的には在家信徒が守るべきとされる「五戒」すなわち五つの基本的な戒律（タイ語では *siin haa*）である。すなわち，不殺生（殺さない），不偸盗（盗まない），不邪淫（不道徳な性行為をしない），不妄語（ウソをつかない），不飲酒（酒を飲まない）の五つの戒律である。後述する「道徳米プロジェクト」の生産者のような特殊な場合を除き，有機農業をやるのにこの五戒を守る必要があるわけではないが，現地の有機農家や研究者によって仏教の戒律や徳目は次のような点で有機農業の実践とかかわると認識されている[7)]。ひとつは「不殺生」である。これは農薬を使わないということとかかわる。殺虫剤や除草剤を使う近代農法は，水田や畑の生物を殺してしまうので，この戒律とはあいいれないことになる。また「不妄語」も有機農業をやるにあたって大事な要素になる。消費者に対してウソをつかない（たとえば農薬を使っているのに使っていないと申告するなど）という正直さは，有機農業にとって重要な要素だからである。また仏教者として完成された人格になるための十波羅蜜のひとつに「忍辱（耐え忍ぶ，*khanti*）」があるが，これが苦労の多い有機農業をやりとげるのに重要な要素と認識されていた。また必要以上の欲望をもたないこと，というのも（安楽で派手な生活を送りたいという）誘惑に抗して地道に有機農業をやりとげるための大事な要

6)　このプラウェートの思想に直接影響されたものかどうかは不明だが，ピニット［Pinit 2012: 204-205］によれば，東北タイのある開発僧が 1992 年から仏教農業中学校（*roongrian mathayom phutkaseet*）という学校を運営するプロジェクトを始めている。

7)　筆者によるスリン県の有機農家ならびに，有機農業の研究者であるスリヤ・チャナチャイ（Suriya Chanachai）博士（スリン・ラチャパット大学）へのインタビュー（2014 年 11 月）による。

素と考えられている[8)]。

次に東北タイのスリン県ならびにヤソトン県で展開してきた有機ジャスミン米の FT を事例に，開発僧や仏教的思想が果たした役割についてみてみたい。

III　フェアトレード・有機農業運動と開発僧

1　スリン県の事例[9)]

東北タイにおける有機米の FT の進展は，1980～90 年代に全国的な規模で生起したさまざまな社会運動，すなわちオルタナティブな開発をもとめる運動，環境保護運動，有機農業運動，また市民の政治参加の動きなどと密接にかかわっている。これらはバラバラに生起したものではなく，たがいに連携しながらおこなわれてきた点に特徴がある。そうしたネットワークのひとつの結節点をつくったのが，「開発僧（*phra nak phathanaa*）」とよばれ農村問題の解決や社会開発に積極的にかかわってきた僧侶たちであった。

スリン県では，1980 年代から 1990 年代にかけて，小規模農家の生活改善のための運動と有機農業運動がからみあいながら展開してきた。その中心にいたのが著名な開発僧であるナーン和尚（*Luang phoo Naan*）である。スリン市郊外のターサワーン村の出身で，同村のサーマッキー寺の住職となったナーン和尚は，農村の貧困問題（コメの不足や借金）や精神の荒廃（酒や博打，家庭崩壊など）を解決しようとさまざまな活動を展開した。和尚がまず取り組んだのは村内の道路整備，それから村から町へつながる道の建設である（1967 年～）。和尚をふくむ僧侶が率先して道普請を行うのをみて，村人も協力するようになったという。通常，僧侶の肉体労働は戒律に反するとされていたので，これは画期的なことだった。続いて和尚は村人の精神面の開発が必要と考え，一部の村人と集団で墓地に行って自己の生活を反省するための瞑想修練会を行うようになる。これによって（借金の一因ともなる）酒やタバコなどの悪習をやめる村人が増えた。また 1978 年には村人の借金の大きな原因のひとつとなっていた化学肥料の共同購入事業を始める。1980 年には前述の TICD（開発のための宗教委員会）のネットワークに加わって外部 NGO とのつながりができ，村落開発に関するさまざまな情報を入手できるようになる。

---

8)　スリン市近郊の出身で，複合農業の実践の先駆者として著名な故マハーユー・スントーンタイ氏も，複合農業を続けるには仏教でいう如意心（*ithibaat*，精進心 *chantha*，努力，精神の集中，熟考から成る）や，原因結果を見極める正思と正見（いずれも悟りに至るための「八正道」の要素のひとつ）が必要だと説いていたという［セーリー 1994: 173-174］。

9)　以下の記述はピッタヤー［1993］，野崎［1995, 2001］，泉［2003］，セーリー（Seri）［1988］，アーラット（Aarat）［2013: 29-32］ならびにナーン和尚（2012 年 11 月 7 日）らスリン・ファーマーズ・サポート（Surin Farmers Support）の草創期に関わった人々への筆者のインタビューによっている。スリン県における有機米の FT の 2001 年以降の発展過程については，Tsuruta and Suriya［2014a］を参照されたい。

村の貧困の根本には，主要産物であるコメの市場の問題があった。借金返済に追われる農家はコメの値段がいちばん安い収穫直後の時期にコメを売ってしまって，必要なコメはあとで高い金をだして買ったり，高い利息を払って借りたりしなければならなかったからである。コメを作る人が自分の食べるコメにも事欠くという不正義に対して，ナーン和尚は何とか解決の手段を探ろうとした。そこで，1981 年に TICD からの融資をうけて寺の境内に米倉を建設し，自家消費米が不足する貧しい農家にコメを貸与する「コメ組合（*sahabaan khaaw*）」を創設した。これはメンバー農家が出資するコメや，寺に寄進されたコメを倉に保管しておき，食べるコメのない人に低利で貸与するというものである。この試みは成功し，多数の住民が参加し借金世帯を減らすのに大きく貢献しただけでなく，近隣村でも同様のコメ組合が急速に普及していった。

このコメ組合はタイの他地域にも叢生した「コメ銀行」と仕組みとしては同じものだが，ナーン和尚は仏法の原理タンマに依っているという意味合いをこめて「サハバーン（ともに維持する）」という名称にこだわった。ナーン和尚の尽力によりあちこちで設立されたコメ組合は，通常のコメ銀行と異なり，村民からコメの出資をうける以外に，仏教儀礼などの際に村人からのタンブン（積徳行）として寺に寄進された現金やコメ，さらには村民が公有地などを使って共同で作ったコメなども資本として組み入れた。また，組合にコメを出資することはタンブンの一種として認識され，比較的余裕のある農家は功徳を積む機会としてこれを利用した。組合設立を模索する村でコメが不足している場合は，他村の組合からコメの融通を受けたり，また住民が「友好のコメ作り（*tham naa krachap mit*）」と称して稲作を行い，生産されたコメを他村の組合に贈呈し支援するという村を越えた交流が生まれた。

こうして開発に必要なコメや資金をあつめるため，ナーン和尚は伝統的な村人のタンブンの実践を利用した。たとえば黄衣奉献祭（*thoot phaa paa*）やカティナ衣奉献祭（*thoot kathin*）など寺に多額のお布施が集まる機会を捉えて，その（本来は寺院内の諸施設の建設などに使われるべき）お布施をコメ組合やその他の開発プロジェクトに利用することを始めた。それまで村人など在家信者にとってタンブンとは寺や仏僧に寄進する行為が主であったが，開発プロジェクトに投資し人助けをすることもタンブンになるということを強調し，村人の意識を徐々に変えていったのである。ナーン和尚はコメ組合以外にも，生活必需品や肥料などを販売する協同組合店舗（1982 年）と貯蓄組合（1985 年）をターサワーン村に設立した。

そのころはまた外部から農村開発に関わるさまざまな NGO 組織や活動家が農村に入ってきた時期でもあった。こうした外部の活動家の支援のもとに，1980 年代なかばころ，ナーン和尚を代表としてスリン・ファーマーズ・サポート（SFS, Surin Farmers Support）という小規模農家支援のためのネットワーク組織が設立される。外部からきたボランティア活動家が重視したのが近代農法に過度に依存しない農法と生活であった。そこで奨励されたのが上述の複合農

業や自然農法である。スリン県では 1980 年代後半から 1990 年代にかけて県内のあちこちに有機農業を実践する農民自身のグループが生まれる。これらの農民グループは，SFS とともに 1987 年ころからコメの共同販売のためのネットワークを作り販路を探していた。当初は NGO のネットワークを通してバンコクなどで販売されていたが，1991 年にスイスの NGO である OS3（のちの Claro Fair Trade）の関係者がナーン和尚のもとを訪れたことがきっかけで，同年から無農薬のコメをスイスへ向けて輸出することになった。最初の年は SFS が中心となり，スリン県内の三つの郡を対象にコメ組合（サハバーン）などからコメを集めて輸出した[10]。当初 SFS 自身は恒久的な精米施設をもたず，メンバーのひとりがスリン市郊外で経営する個人の精米所に精米と包装を依頼していた。1998 年，ナーン和尚は社会投資基金 SIF より融資をうけ鉄筋コンクリートの生活協同組合をサーマッキー寺院の境内に建設し，そこが輸出米の真空パック詰めの作業場として使用されるようになる。同じころナーン和尚が県外から中古の精米機を調達し，これをターサワーン村にほど近いコークマカ村に設置，ここが輸出米の精米施設として利用された。2001 年には政府補助金を得て大規模な精米所が建設され，ようやく有機米の加工と輸出が安定的に行えるようになった。

2　ヤソトン県の事例[11]

スリン県の近隣のヤソトン県は，スリン県とならんで FT 用の有機ジャスミン米の栽培が盛んな地域である。ヤソトン県に数ある有機米生産組合のうちネイチャー・ケア・ソサエティ（NCS, Nature Care Society, *chomrom rak thammachaat*）は最も古いもののひとつである。その起源のひとつに 1983 年に伝統的な薬草の知識を活用するために同県クッチュム郡の病院の医者の協力をえて設立された伝統医協会がある。1984 年から NGO の支援により「自立のための薬草利用プロジェクト」がはじまり，メンバー農家が畑に薬草などを植えるようになる。

10)　こうしてナーン和尚の活動が地理的に拡大していくにつれて，拠点とするターサワーン村の住民とナーン和尚の関係は逆に冷え込んでいったようである。ピニット［Pinit 2012: 189, 228-230］によればターサワーン村のコメ組合は FT がはじまったまさにその時期（1992 年）に活動を停止している。その理由としては組合の運営をめぐる和尚と村人の対立があったと簡単に述べられており，その対立がコメの輸出事業と関係があったのかどうかは定かではないが，その後も村の住民は（有機 FT 米の生産を含む）和尚のプロジェクトに協力的ではなかった。ピニットの議論が示唆しているのは，1990 年代以降の農村の社会経済的変化のなかで，富の共有を目指し村人の奉仕精神に訴えるような和尚の村落開発手法が時代に合わなくなってきたということである。つまり農外収入が増加し，都会で働く子弟からの仕送りも増え，また村レベルで行政による開発プロジェクトが多額の予算のもとに実行されるようになった現在では，1970～80 年代には効果的だったナーン和尚の開発手法が簡単には通用しなくなったのだと考えられる。こうした変化は，当初は理念的な運動として始まった有機農業や FT のビジネス化の流れとも並行している。

11)　以下の記述で NCS に関する部分は，同団体の創設者のひとりソムワン・シーマンタ（Somwang Siimanta）氏へのインタビュー（2012 年 3 月 13 日および 11 月 9 日，2013 年 9 月 12 日）ならびにナンティヤー（Nuntiya）［1998: 3］に依っている。NCS および後述のナムオーム・グループの詳細については［Tsuruta and Suriya 2014b］を参照せよ。

このころ一部の農民は化学肥料や農薬をつかう近代農法に疑問をもつようになり,「薬草プロジェクト」や NGO のワークショップなどを通して複合農業の考えかたと実践が徐々に浸透してくる。1990 年，有機農業と農家の自立の推進のために NCS がたちあげられ，コメの共同出荷へむけた模索が始まる。1991 年に NCS は精米所を建設し，有機米の生産と輸出に徐々に軸足を移していくことになる。当初はスリン県で活動するナーン和尚とも NGO のネットワークを通して密接に連携し,有機米の FT が始まった初期には NCS のメンバーが生産したコメがナーン和尚のグループの精米所やパッキング施設に運ばれ，出荷されていたようである。

この初期の薬草プロジェクトの実現には，著名な開発僧のひとりであるスパジャラワット師の尽力があった。クッチュム郡のターラート寺にいた師は，村人が大金を出して近代的な病院に通わなくて済むように，薬草などを使った伝統療法を復活させることを試みた。また，ナーン和尚の場合と同様に，近代農法の導入により村人が借金に苦しむ姿を見て，NGO と協力して有機農業（複合農業）を推進してきた。複合農業に懐疑的な農民にそのメリットを示すために，自分の親戚の農地でまず導入し，成果を目に見える形にしたという。また師は開発の中で残された森林の保護の問題にも（荒れた森林に薬草を植えさせるなどして）積極的にかかわった。[西川・野田編 2001 : 278-281]。伝統的な薬草を復活させることで農村の自立を達成しようというスパジャラワット師の考えは，NGO や（TICD が組織する開発僧のネットワークである）セーキヤタムのセミナーを通して共有される。またこうしたセミナーを通し，師自身も複合農業のアイデアを得たという。師はまたプッタタートにならってタンマ的共同体（*thammika chumchon*）という調和的な農村共同体の理念を提起した［Ito 2012: 212-213］。

ヤソトン県にはまた，こうした仏僧が主導してきた FT・有機農業運動とは無関係に有機ジャスミン米生産とその FT に乗り出したグループがある。そのもっとも有力なものが同県ナムオーム郡にあるグループである。このビジネス志向のグループでさえも，（FT 商品の販売額の一部が生産者に還元される）FT プレミアムの一部を，額としては少ないがタンブン行為の一環として地域の寺院や学校に対する布施として用いていることは注目に値する[12)]。

IV.「道徳米」プロジェクトの展開[13)]

上記ヤソトン県の農民組合 NCS から派生してきた興味深い動きに「道徳米（*khaaw khunnatham*）」プロジェクトがある。これは NCS の創設者であり中心メンバーでもあったウィチット（Wicit）氏が，NCS の所在地からそれほど遠くない生まれ故郷のヤソトン県パーテ

12)　ナムオーム・グループの内部資料による。
13)　以下の記述は，引用文献を明示した箇所以外は，道徳米プロジェクトを創始したウィチット・ブンスーン（Wicit Bunsuung）氏への筆者のインタビューによっている（2013 年 9 月 11 日，2014 年 11 月 6 日）。

ィウ郡のスワンタムルアムチャイ寺を拠点として 2001～02 年ころから徐々に始めたプロジェクトである。そこで彼は以前からあたためていたアイデアで，NCS では抵抗が大きく実現できなかったことを実行しようとする。それは，単に生産物が有機（無毒）であるだけではなく，農家自身も酒やタバコ，ギャンブルなどの「毒」とは無縁の「道徳的」な生産者を作ろうというプロジェクトであった。ナーン和尚の事例と同様に，酒やギャンブルは農家の借金が減らない主要な原因のひとつでもあったので，それを減らすことは貧困問題の軽減にもつながることになる。

当初は農民向けのセミナーなどを開催するにとどまっていたが，2005～2006 年ころから「道徳米プロジェクト」としての本格的な有機米の生産と出荷が始まる。生産米が「道徳米」となるための条件は，生産者本人が（1）飲酒，喫煙，ギャンブルを一切行わない，（2）仏教の五戒を実践すべく努力する，という二点であった。また 2006 年からタイ国内の有機認証である ACT（国際的には IFOAM）の認証をうける。2006/2007 年には 108 人の生産者が加入したが，1 年後に「道徳米」の基準に達したのはわずか 38 名だった。2012 年現在では戒律を維持し有機米生産をしている農家が 119 世帯と大幅に増え，その生産圃場（「非暴力平和地区（*kheet sangop santi ahingsaa*）」とよばれる）は約 1,970 ライに達した[14)]。ヤソトン県以外にも多数の道徳米生産者がおり，近隣のアムナートチャルーン，ムクダハーン，ウボンラーチャタニー，ローイエットなどの諸県に散らばっている（図 1 参照）。

生産しているコメのほとんどは，一般的なジャスミン米の品種であるが，特筆すべきは，このプロジェクトでは稲の伝統品種の保全活動を行っていることである。農家の圃場に 200 以上のコメの在来品種が保全されており，また一部のメンバーが独自に在来種と改良種をかけあわせるなどして農民自身が品種改良を行っている。そうしてできた新品種のひとつに仏陀の前世の第十生にあたる布施太子ヴェッサンタラ（Vessandara）の名前を冠してヴェッサンタラ米として商品化された香り米がある。また多数の在来品種のコメを混ぜてパッキングし，「150 品種のコメ」と称して高い値段で販売している商品もある。拠点とする寺院内には「コメ種苗銀行」と称する施設も作っている。

コメの出荷先については，以前は NCS と同じルートで輸出していたようだが，現在では国内での販売に重点をおいている。販売先として特筆すべきはバンコクに拠点をおくドキュメンタリーフィルム制作会社のブラパーTV である。ブラパーTV ではおそらく 2010 年ころから「稲作農民支援のためのコメを食べる人のネットワーク（*khrueakhaai khon kin khaaw kueakuun chaawnaa*）」を設立し，賛同者を募って「道徳米」を共同購入する事業を始めた。消費者と生産者が直接的に結びつき，生産者が決めた値段を消費者が前払いすることによって

14) 以上の生産者数などの数値は道徳米プロジェクトのホームページ［Moral Rice (online) n.d.］による。なお面積単位の 1 ライは約 0.16ha に相当する。

生産者を支援しようという野心的な取り組みである。ブラパーTV の代表者の言によるとそれは「単に生産者と消費者という関係ではなく，両者が手と心をつなげる取り組みである。コメを単なる腹をふくらます手段としてとらえるのではなく，コメの恩恵，それを作る農家の恩恵にも思いを馳せるために」設立された［TV Buuraphaa (online) 2010］。こうして影響力のあるマスコミが事業を立ち上げたことで，初期にはかなりの人数がメンバーとして登録しコメを購入したが，おそらく購入価格が一般のコメよりかなり高いという理由で，2014 年の時点ではメンバー数がむしろ減少傾向にあるということであった。これ以外の販路として，「道徳米」は拠点とする寺院の前にある店で直接販売されているほか，異端の仏教セクトであるサンティ・アソークや，ヤソトンに拠点をおき有機米のさまざまな加工品を生産している T 社にも出荷されている。

こうした道徳米プロジェクトには実は先例があった。スリン県の隣のブリラム県サクーン村では，かつて長く僧侶を務めていたパーイ村長の指導のもとで， 1980 年代に複合農業などの村落開発が実践されていた。1989 年，パーイ村長はイトーノーイという山刀の名前をつけたコメ銀行と複合農業を核としたプロジェクトを始める。これに参加するには，仏教の五戒を守ることのほか野菜や果樹などを 60 種類以上植えることなどの条件があった。会員になると農業資金借り入れの権利を得ることができたほか，プロジェクトの運営する他の事業（植林や生協など）にも参加することができた。さらにメンバーが自然農法によって生産した農作物や地鶏などは「イトーノーイ」ブランドでバンコクにも出荷されていた。またコメ銀行の設立の際の元手として，五穀豊穣を祈って村人が寺院にモミ米を寄進する行事「モミの塔作り」で集められたモミ米があてられた[15)]。このイトーノーイブランドの商品が現在でも販売されているかどうかは不明だが，このパーイ村長の試みは道徳米プロジェクトのようなある種の国内 FT の先駆的な試みと位置づけることができる。

V　おわりに

本稿では，「タンマ（仏法）の状態にある交易」とタイ語で表現される FT が，じっさいに仏教的な思想や実践とどのような関わりをもっていたのかを検討してきた。プッタタートを始めとする思想家や知識人は仏教原理の検討から社会的正義の実現と環境保護という現代的な倫理を導きだし，それがその後の（FT 運動や有機運動をふくむ）オルタナティブな開発を求める運動を理論的に支えるものとなった。村落レベルでは開発僧らがタンマの理念に基づきながら地域の事情を考慮しつつ独自の開発実践を行ってきた。スリン県における有機米の FT は，そ

15)　以上のサクーン村に関する記述は曹洞宗ボランティア会『シャンティ』1994 年増刊冬号の特集記事「農村の自立と仏教」，セーリー［1994: 105-114］ならびに西川［2001: 55］による。

の起源をたどれば，後に著名な開発僧となるナーン和尚が村民のコメを結集して従来にない形態の協働組織（コメ組合―サハバーン・カーウ）を作ったことに始まっていた。またナーン和尚は，在家者の仏教実践の重要な形態であり村の経済にとっても大きな意味をもつ「タンブン」の行為によって寺に寄進された金品を，村人の相互扶助のための共同事業にも使用できると再解釈し，集まった資金を農村開発のために利用した。さらに，こうした開発僧を中心としたネットワークのなかでさまざまなアイデア（オルタナティブな開発の意義といった理念的なものを含む）や実践的な開発手法（複合農業・有機農業の推進，薬草の利用，協同組合の設立など）が共有されてきた。こうしてタイ東北部における有機農産物の FT の発展に関して，少なくともその初期段階においては，仏教が果たした役割がたいへん大きかったと考えられる。

社会の公正さを求めることは，しかし，何も仏教の専売特許ではない。現在の FT 運動がもともとは欧米のキリスト教会系の慈善団体から始まったことはよく知られている。また現在でもキリスト教系団体のなかには FT を直接実践したり，間接的に支援したりしているところも多い[16]。こうして消費国（先進国）側の宗教団体の強い支援のもとに FT が発展してきた経緯があるが，東北タイの事例は，逆に生産国側の内発的な動きとして，宗教に関わる実践や思想がオルタナティブな農村発展を求める土着の運動と合流し，のちの FT 発展の基盤を提供したというところに独特の性質があるように思われる。

東北タイで有機米の FT が始まって 20 年以上が経過した現在，有機米生産の現場においては，多くの場合 FT 認証は単なる商売上の便宜のひとつであるかのように見なされている。しかし他方で，もともとの運動の起源や理念には仏教的なものがあったということが完全に忘れさられたわけではない。2014 年現在，ナーン和尚は高齢ながら元の寺院に健在で，依然として一部の有機農家や FT 関係者にとっての精神的な拠り所となっている。また有機米の FT が儲かるビジネスとして急拡大していくなかで，その倫理的起源に立ち返るような「道徳米プロジェクト」のような動きが生起している。それは単なる宗教的倫理の復興の問題ではなく，国内の消費者にアピールするブランドを作り，一般のコメ市場流通とは違う販路を開拓するというマーケティングの問題でもある。このように，輸出米市場での競争が激化するなかで，あらためて国内の有機米に対する需要に目を向け，生産者と消費者が直接つながるようなオルタナティブなコメ流通の創出を志しているという意味で，この道徳米プロジェクトはたいへん注目に値する試みであるといえる。

16) タイ国内の FT 実践の先駆的な事例として，日本福音ルーテル聖パウロ教会の牧師松本氏が中心となって立ち上げた「わかちあいプロジェクト」がある。同プロジェクトでは，1996 年から北部タイの山岳民族の生活支援のためコーヒーの買い付けを行ってきた。同プロジェクトが，コーヒーの FT としての輸出に力を入れると同時に，2001 年からチェンマイ市内にコーヒーショップを開いて（道徳米の場合と同様に）国内のマーケット開拓に尽力してきたことは特筆に値する［わかちあいプロジェクト (online) 2007］。

参 考 文 献

Aarat Saengubon

2013　*Senthaang Chaawnaa Khaakhaaw*, Surin: Rice Fund Surin Cooperative.

Becchetti, L., P. Conzo and G. Gianfreda

2009　Market Access, Organic Farming and Productivity: the Determinants of Creation of Economic Value on a Sample of Fair Trade Affiliated Thai Farmers, *Econometica Working Papers* 5.

Buddhadasa, Bhikkhu

1986　*Dhammic Socialism*, Bangkok: Thai Inter-religious Commission for Development (TICD).

Ito, Tomomi

2012　*Modern Thai Buddhism and Buddhadasa Bhikkhu: A Social History,* Singapore: NUS Press.

泉経武

2003　「「開発」の中の仏教僧侶と社会活動――タイ・スリン県の「開発僧」ナーン比丘の事例研究」『宗教学論集』22: 93-110.

北原淳

1996　『共同体の思想――村落開発理論の比較社会学』京都: 世界思想社.

Manas Losirikul and Prasit Kanchana

2007　The Possibility of Hom Mali Rice Production in Organic Farming Systems as an Alternative Farming Career with Poverty Alleviation Potential for Lower-Northeastern Farmers: Surin Province Case. *Khon Kaen Agriculture Journal* 35(2): 177-188.

Moral Rice

n.d.　"*Khwaam pen maa*." Accesed on November 30, 2014. http://www.moralrice.net/

西川潤

2001　「タイ仏教からみた開発と発展」『アジアの内発的発展』西川潤（編）, 30-59 ページ, 東京: 藤原書店.

西川潤・野田真里（編）

2001　『仏教・開発・NGO――タイ開発僧に学ぶ共生の智慧』東京: 新評論.

Nitiphong Songsrirote and Charuk Singhapreecha

2007 Technical Efficiency and Its Determinants on Conventional and Certified Organic Jasmine Rice Farms in Yasothon Province. *Thammasat Economic Journal* 25(2): 96-133.

野田真里

2009 「タイ『足るを知る経済』と持続可能な開発――「貪欲経済」の終焉とグローバル化時代の内発的発展に向けて」『協同体主義――中間組織が開くオルタナティブ』田島英一・山本純一（編），47-73 ページ，東京: 慶應義塾大学出版会.

野崎明

1995 「タイの新しい農村開発運動――東北タイの開発僧の事例研究」『東北学院大学論集』129: 107-149.

2001 「社会開発に参画するタイの開発僧」『仏教・開発・NGO』西川潤・野田真里（編），120-148 ページ，東京: 新評論.

Nuntiya Hutanuwatr

1998 *Thun Chumchon: Botrian lae prasopkarn roongsiikhaaw chomrom rak thammachart*, Bangkok: Sathaaban chumchon thongthin phathana.

岡部真由美

2014 『「開発」を生きる仏教僧――タイにおける開発言説と宗教実践の民族誌的研究』東京: 風響社.

Payutto, Ven. P. A

1994 *Buddhist Economics: A Middle Way for the Market Place*, Bangkok: Buddhadhamma Foundation (Revised edition).

Pinit Lapthananon

2012 *Development Monks in Northeast Thailand*, Kyoto: Kyoto University Press.

ピッタヤー・ウォンクン

1993 『村の衆には借りがある――報徳の開発僧』野中耕一（訳），バンコク: 燦々社.

Prawase Wasi

1988 Buddhist Agriculture and the Tranquility of Thai Society, In *Turning Point of Thai Farmers*, edited by Seri Phongphit and Robert Bennoun, pp. 1-43, Bangkok: THIRD (Thai Institute for Rural Development).

櫻井義秀

2008 『東北タイの開発僧――宗教と社会貢献』松戸: 梓出版社.

Seri Phongphit

1988　*Religion in Changing Society*, Hongkong: Arena Press.

セーリー・ポンピット（野中耕一編訳）

1994　『村は自立できる――東北タイの老農（改訂版）』バンコク：燦々社.

Sulak Sivaraksa

2003　Alternative to Consumerism, In *Liberating Faith, Religious Voices for Justice, Peace and Ecological Wisdom*, edited by Roger. S. Gottlieb, pp. 287-291, Lanham: Rowman & Littlefield.

Tsuruta, Tadasu and Suriya Chanachai

2014a　Fair Trade of Organic Jasmine Rice in Surin Province, Northeast Thailand: Background and Analysis of its Development Process, In *Poverty Alleviation and Rural Development through Alternative Socio-economic Regimes*, edited by Koichi Ikegami et. al., pp. 75-92, Bangkok: Kasetsart University.

2014b　A Paradox in Fair Trade of Organic Jasmine Rice in Yasothon Province of Northeast Thailand: Business or Social Movement?『農業・食料経済研究』60(2): 1-9.

TV Buuraphaa

2010　"*Khrueakhaai khon kin khaaw kueakuun chaawnaa*." Accesed on November 30, 2014.
http://www.tvburabha.com/tvb/rice/ta2.html

UNDP (United Nations Development Program)

2007　*Thailand Human Development Report 2007: Sufficiency Economy and Human Development*, Bangkok: UNDP.

わかちあいプロジェクト

2007　「自立支援・タイ・山岳民　コーヒープロジェクト」2015 年 3 月 23 日アクセス.
http://www.wakachiai.com/wp/sef_reliance/thai.html

Withuun Liamcamruun (ed.)

1996　*Kaseettrakam Thaang Lueak: Khwaam maai khwaam penmaa lae teknik wiithii*, Mahakam kaseet lae ahaan ploot saan phit.